

スゴイ農業、スゴイJA①

JA自己改革の現場から

IPM導入で日本一のオクラ産地を持続的に発展させる
——JAいぶすき（鹿児島県）の取り組み

和泉真理（一般社団法人J C総研客員研究員）



JAいぶすきは日本一のオクラ生産量を誇る産地です。IPMを通じた「持続的な農業」の導入に取り組んでいます。さらなるオクラに携わる人の確保、販路の開拓などを通じて見えてくるのは、次世代につながる「持続的な産地」の構築でした。

オクラの露地栽培で土着の天敵を利用したIPMが急速に拡大中

「持続的な農業」とは、農薬や化学肥料の投入を減らす環境に優しい農業を意味することが多い。優良な土壌、水、空気、自然が維持されるように農地を管理することで、次世代以降に農業を継続させることができる。

JAいぶすきが管内とする鹿児島県薩摩半島の南部の火山性台地は、昔は思うように水が得られず戦後の高度成長期には全国でも有

いずみ・まり

1960年、東京都生まれ。東北大学農学部卒業。英国オックスフォード大学修士課程修了。農林水産省勤務を経て現職。主な著書に『英国の農業環境政策』（富民協会、1989年）、『農業の新人革命』（農山漁村文化協会、2012年）、『ダイナミックに展開するヨーロッパの農業協同組合』（筑波書房、2015年）。

数の過疎地帯であった。しかし、昭和45年度から59年度に実施された国営かんがい排水事業で一変し、今では広大な畑作地帯となり、野菜、畜産物、茶、観葉植物など多様な農産物が生産され、ソラマメ、オクラについては日本一の生産量を誇っている。

その日本一のオクラ産地で、今、天敵を利用したIPMの取り組みが急速な広がりを見せている。

IPM (Integrated Pest Management) は「総合的病害虫・雑草管理」と訳され、化学合成



左/IPM実践圃場の看板。鹿児島県の統一マークで県域にも広げていきたい 中/ソルゴーに付いたアブラムシを天敵が食べる 右/部会長の前川さん。IPM栽培の技術の確立と普及に注力する。生産者にとって暑い時期の防除作業が減るメリットだけでなく、消費者にとっても省農薬の農産物には大きなニーズがある。花にもオクラ同様のねばりがあり、エディブルフラワーでもあると、オクラの魅力を語る

農薬以外のさまざまな技術を合理的に組み合わせ、病害虫や雑草を防除することである。IPMには天敵の利用、輪作の導入などさまざまな方法があるが、JAいぶすきでは、オクラに発生するアブラムシを、天敵を利用して抑えている。施設栽培においてハウスの中に天敵を放すIPMは国内の野菜産地などで見られるようになってきているが、JAいぶすきのオクラのIPMの特徴は、オクラの主力である露地栽培で土着の天敵を利用してアブラムシの発生を抑えることに成果を出していること、産地での取り組みが急速に拡大していることである。

IPMのオクラ部会への導入時から取り組んでいるJAいぶすき^{いぶすき}指宿野菜部会オクラ部会長の前川信男さん(52)の畑では、オクラの圃場の周りやオクラの列の間にソルゴーが植わっている。ソルゴーに付くアブラムシを求めてテントウムシやヒラタアブ、寄生蜂などの天敵が集まり、さらに近くのオクラに付いているアブラムシも食べるという仕組みである。

IPMに取り組み始めたのは4年前で、当初はJAの野菜部会の役員のみが県の農業開発総合センターの指導のもとで始め、その成果を検証してきた。成果が分かったので、次は普及させるときだと、まずオクラ生産者の中

でも環境に関心の高い生産者で構成されるエコオクラグループの二十数名で2年前から取り組んだ。

効果を実感したので、オクラ部会としてマニュアルを作成し、説明会を開催し、JA管内の地域別の全てのオクラ部会に拡大していった。IPMに取り組むオクラの面積は、昨年は15ha。今年は30haで取り組んでみよう、となっている。JAも指宿産のオクラ全体をIPMでやっという積極的に取り組んでいる。JAの営農指導では、ソルゴーを植えること、他の害虫に対する農薬については天敵を殺さないものを選択することを生産者に伝えている。

IPMの効果について、前川さんは、「アブラムシは厄介で、露地ものが草丈30~40cmになり暖かくなったところに一気に付いてしまう。天敵を使うことで、今までは3、4回かけていたアブラムシへの殺虫剤が2回しかかけなくてよくなった。昨年は農薬が3分の1に減った」という。

アブラムシの発生の初期、天敵がまだ十分に集まっていない時期には、現在は農薬を1回散布しているが、それをやめる方法も開発中だ。前川さんの圃場では、ソルゴーが育つ前に天敵を引きつけるため、ソルゴーとともに

にホーリーバジルを植えていた。

農薬を使わなくて済む効果は、オクラ生産者にとって絶大である。農薬代を節約し、酷暑の中で行われる農薬散布の労力を節減するだけではない。オクラは花が咲いてから収穫までの日数が短く、収穫適期を逃すことはできない。しかし、農薬を散布すれば24時間出荷できず、この間の損失は大きい。また、農薬に対する害虫の耐性取得を心配する必要もない。

現在、面積が広がっているのは露地栽培のオクラだが、昨年から試験的にハウスのオクラ栽培でもIPM技術の開発に取り組んでいる。前川さんのハウスでは、その試行がされていた。ハウス内に土着天敵は入れないので、テナントウムシと寄生蜂をハウス内に放している。また、ソルゴーは寒い時期に育たないので、2月には麦をまき、ここにオクラには害のない別のアブラムシを付け、増えたところに天敵を放つというやり方をとっている。ハウスでの収穫はあと少しで終わる中、殺虫剤は例年の3分の1で済んだとこちらも成果は上々のようだ。

前川さんは、「自分たちでIPMの技術を習得できてきたので、これからはわれわれが産地の他の生産者に説明していきたい。今後は、



オクラの花に囲まれ、両親とともに作業する原永さん

IPMへの取り組みを農産物の付加価値にどのようにつなげていくかを考えたい」と展望を語る。

また、JAいぶすきのオクラ生産者は、夏はオクラ、冬はソラマメあるいはスナップエンドウを生産することが多い。冬場の豆類に付くスリップス（アザミウマ）対策にも天敵を使えないか、夏と冬の両方使えるようなIPM技術を確立できないか、とも考えている。

毎年30人近くが新規に就農している

JAいぶすきのオクラのIPMは試験的に取り組み始めてから4年しかたっていないにもかかわらず、急速に普及している。日本一のオクラの産地を維持・発展させるためにJAと生産者がこの新しい技術に前向きに取り組んでいる。

JAいぶすきオクラ部会の産地の明るさを支えるひとつは、この10年ほど、毎年30人ほどの新規就農者がおり、前川さんいわく「オクラ生産をやめる農業者より、始める農業者の数の方が多い」状態にあることだ。普及センターで新規就農者向けのニューファーマーズ塾を開催する以外は特段の新規就農者支援策を講じているわけではないが、夏のオクラと冬のソラマメやスナップエンドウを組み合わせ、露地栽培でも20aもあれば農業で生活できる。就農に必要な農地面積も初期費用も小さいことが就農希望者を引きつけているのだろう。

また、指宿のオクラは完全に分業化しており、オクラの袋詰めは高齢女性を中心とする「詰め子さん」の専業である。袋詰めされたものを、JAが梱包・出荷する。新規就農して生産も調製もとなると大変だが、農家は生産に専念すればよいのも魅力的だ。

就農して3年目になる原永真衣さん（24）



左／温暖な気候とかんがい用水、耕畜連携を生かし、さまざまな方策を手がけてきた西村組合長。組合長室に飾られた観葉植物もJA管内産 上／収穫したばかりのオクラは柔らかくそのまま生で食べられるほど

もそのような新規就農のオクラ生産者である。原永さんの祖父はこの地でオクラとソラマメを作っていた。父親は他産業に従事していたが、原永さんは小学校のころから祖父の手伝いをし、農業が好きだったそうだ。鹿児島県立農業大学校を卒業し、JAの営農指導員になる道もあったが、指導するより作る方になりたいと祖父が以前使っていた農地で就農した。原永さんが就農したら、父親も早期退職して就農し、今は原永さんと両親の3人で70aの農地でオクラやトウモロコシ、自然薯^{じねんじょ}などを作っている。

新規就農者は、原永さんのような「孫ターン」「Uターン」が多いそうだが、ほとんどが男性で、女性の新規就農者は珍しい。

原永さんも去年からオクラの隣にソルゴーを植えている。年々農薬代が減っているほか、ソルゴーが良い風除け^よになっていると効果を実感している。

原永さんは、「農業をやっていて楽しい。これからハウスを建てたい。いろいろな作物を作って、自分に合うものを探してみたい」と笑顔で夢を語ってくれた。父親も退職して農業を始めたらすっかり健康になったそうだ。

IPMや新規就農者を支える営農指導員

オクラ部会のIPMを支援し、毎年来る新規就農者の定着を支えるのは、JAの営農指導員である。JAいぶすきの営農指導員は、採用時からずっと営農指導の仕事に従事する。私を案内してくれた営農指導員の秋元智さんも、20年以上営農一筋だそうだ。

以前はアブラムシが少しでもいれば全面的に農薬を散布するための初期発見を重視していたが、IPMを導入してからは、多少アブラムシが発生しても我慢するように指導している。アブラムシがどの程度の密度までなら天敵に頼れるか、我慢の限度が分かるようになってきたと秋元さんは言う。

JAいぶすきでは、今年度からはTACも営農指導員の兼任とした。これについて、JAいぶすきの西村仁代表理事組合長は、「営農指導員だと言え、たとえ知識が不十分であっても、先輩指導員につないでくれるから、と農家は頼りにしてくれる」そうで、営農指導員への組合員の信頼の高さを感じさせる。

「JAは待ちの姿勢ではいけない」「職員は若い農業者と付き合い。彼らには拡大意欲があ

る」と、西村組合長は日頃職員に熱く語っている。IPMについても、営農指導員には「とにかくたくさん圃場を訪れ、そこで経験則を集めて、防除が必要かどうかといったノウハウを身に付けよう」と組合長自ら強く呼びかけている。このノウハウが身に付けば、営農指導員の生産者からの信頼をさらに高められるからだ。

オクラの新しい価値の創造 ～産地の維持に向けて～

西村組合長は、「将来、化学肥料の原料が国際競争の激化の中で厳しくなっても、畜産があるからこの産地は生き残れる」と有機肥料を用いる耕畜連携の重要性を強調する。IPMや耕畜連携による「持続的な農業」を展開しつつ、販売については「ストーリー」が必要と強調する。そのひとつとして最近着手しているのがオクラパウダーである。オクラはネバネバ野菜として高い栄養価があることは知られているが、これをパウダー化し、「健康」をキーワードにした新しい商品・事業を開発しようと指宿市とともに取り組んでいる。

「農産物の過剰な規格は大嫌い」と言う西村組合長は、現在は袋詰めされているオクラのバラ売りの可能性なども小売店と提携して試

行している。バラ売りが普及すれば、詰めるための作業時間が減ってより鮮度の高いオクラを消費者に届けることができるし、高齢化で減少しつつある「詰め子さん」の作業量も減る。

また、新規就農者が増えるのはいいが、彼らをJAに引きつけるための組合員教育も必要で、そのための手も打たなくては、と将来を見据える。

JAいぶすきの日本一のオクラ産地は、IPMや畜産堆肥を使つての「持続的な農業」、多くの新規就農者、オクラの需要の拡大と新しい付加価値の創出などを通じて、次世代に続く産地をつくっている。さらに、「詰め子さん」の高齢化と減少、若い農業者のJA離れといった次に見えてきている課題に対し、先手を打とうとしているのである。



農業・地域・JAを担うリーダーの雑誌



11月号 定価 668円(税込)

JAグループ 家の光協会
〒105-0001 東京都港区虎ノ門2-8-10 虎ノ門15森ビル(仮移転先)
TEL:03-3266-9002 FAX:03-3266-9047
<http://www.ienohikari.net>

JA青年組織 盟友皆読運動 展開中

特集 青年農業者のためのライフプラン講座

親から子へのスムーズな事業承継には、時期の設定や段取りを整えるなど、本人や家族のライフプランに基づいた計画が必要です。そこで、青年農業者がそのために経営をどのようにしていくのか、ライフプランの立て方を解説。これからの人生設計を考える一助とします。

別冊付録 “食と農の応援団” 獲得大作戦! 世代別 アプローチ法 & 実践事例集

対象を年代別に分け、アプローチの仕方から伝えるべき内容、伝え方のポイントを、識者の提言や実践事例をもとに紹介。同時に、動画やSNSなど今日的なツールを活用した取り組みについても、効果的な手法を紹介します。

(タイトル、内容は変更することがあります)